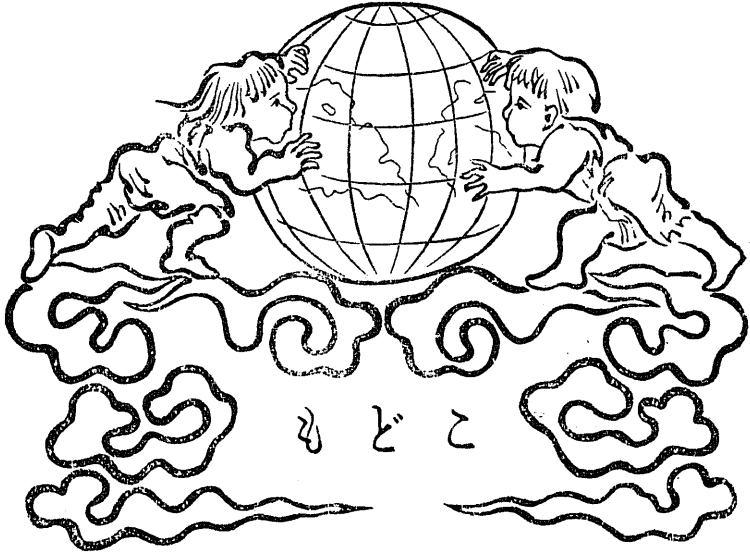


もど子と人婦
號六第卷參第



百合姫(ついで)

やまとの翁

あまりの恐さ怖ろしさに
 百合姫は 思はず叫び出さ
 うとしましたが、 どうした
 のでしゅー 聲が 出ません。
 仕方がないから、 起ち上つ
 て逃げ出さうとしましたが
 どこを見ても 週圍が、 丸
 で 荆棘の木で取りかこま

れて居るから どこへも逃げることも出来ません。あゝ、困つ
 た、誰か助けにきて呉れる人がないのか知ら と思つて、不圖、
 側を見ると、其處に一本の古い櫨の大木があつて、いゝ鹽梅に、
 根の方が大きなウロになつて居ます。仕方がないから、百合姫
 は 夜になると其中に這入つて眠ることにして、夫から雨でも
 降つたり 大風でも吹く時には、又其中で避ける事にしました。
 食べ物といつて、別に何もありませんから、草の根だの、實だ
 のを取つて來て食べるより他に仕方がありません。夫から又秋
 になると、其處らへ出て 澤山木の葉を集めて來て、木のウロ
 の中に積んで置いて、冬寒くなつて 雪でも降る時分には 其
 中へもぐり込んで身軀を温めます。もー 百合姫の立派な衣服

は、すっかりポロ／＼になつて仕舞ひましたから。

可愛相じゃありませんか、百合姫はこんなにして、寂しいヤ
ヤ荒野原で、たった一人で、こんな難儀な目に遭つて居ます。

所がある年の春、この國の殿様が、此野原へ狩りに來て、だ
ん／＼と鳥を追つて、とう／＼百合姫の居る場所へ這入り込んで來
ました。そして、ひょいと大きな櫛の木の下を見ると、そこに
美しい百合姫がじっと座つて居るのでしよ。殿様は吃驚して、
『まゝ、お前 どうしてこんな寂しい所へ來たんだ？』
といつて尋ねましたが、姫は何んとも答へません。夫も其筈で
す。あの時からもう悉り啞になつて居るのです。そこで殿
様は、どうにも可愛相でなりませんから、百合姫をば一所に馬

に乗せて、とーく御殿へ連れて歸りました。それから、殿様は、美しい衣服を着代へさせたり、甘い物を食べさせたりして、いろくくと大事にしました。何時までも百合姫は口を利くことができません。それでも、中々奇麗なお姫様でしたから、暫くたってから、殿様の奥様になりました。

夫から一年ほどたって、百合姫に一人のお子さんが生まれましたが、丁度其晩のこと、姫が一人床の中に休んで居ると、どこからとなく、守り神様が其部屋に這入って来て、百合姫に申します。

『さー 眞實のことをおいひ、お前、わたしの禁て置いた門を開けたに相違なからう、さ、お前の口を開けて物言へる様に』

して上げるから、すぐ白状なさい。何時までも、強情ばって
 言はないなら、仕方がないからお前の子を取って行くよ』
 と言って神様は、姫の口を物言へる様にしてくれましたが、
 姫はどこまでも強情です。

『イーエ 私しはあの門は明けやしませぬ』

此返事を聞くと、守り神様は、不意に姫の抱いて居た赤ん坊を
 取って、どこかへ消えて仕舞ひました。

さて、翌朝になると、子供が見えぬといふので御殿中は大騒
 ぎになりました。何でも、これは奥様の仕業であらう。奥様が
 御自分で殺したに違ないといって皆で密々話しあって居りま
 す。所が姫は夫を聞いても、悲しい事には何も言ふ事が出来

ない。然し殿様丈^{おんさま}けは、夫^{つま}でも決して奥様^{おくさま}のした事^{こと}とは信^{しん}じま
せんでした。

それから、大分^{おほぶん}過ぎてから、又^{また}一人^{ひとり}お子^こさんが出来^{でき}ましたが、
其^{その}晩^{ばん}に又^{また}、守^{まも}り神様^{かみさま}が姫^{ひめ}の前^{まえ}に出^でて來^きて申^まします。

『眞實^{まこと}の事^{こと}を言^いはないか、白狀^{はくじょう}すれば子^こどもよ返^{かえ}してやるし、
物^{もの}も言^いへる様^{よう}にしてやる。夫^{つま}でもまだ知^しらぬといふなら、今^{いま}
生^{うま}れた子^こも連^つれて行^いくぞよ』
けれども姫^{ひめ}は強情^{きやうじやう}です。

『イーエ 私^{わたし}は決^{けつ}して門^{かど}を明^あけませぬ』
すると守^{まも}り神様^{かみさま}は、いきなり又^{また}赤子^{あかこ}を引^ひっさらって、飛^とんで行^い
きました。

そこで翌朝になると、又大變な騒ぎになりました。これはどうしても、奥様が自分で殺したのだといふので、家來どもは、と
 一く殿様に申し上げて、何でも奥様を一度べて見よーと言
 ひ出しました。けれども、殿様は、よもや奥様がそんな事をな
 さらうとは信じませんから、來の言ふ事は用りませんでした。
 所が、其翌る年に奥様は、又可愛い女の子を生みました、
 其晩も亦守り神様がやゝて來て『まーこちらをぞ覽』とい
 て、神様が御自分で抱いて居らした二人の子を姫に見せて、
 『これでもお前まだ白狀する氣にならないか』
 といひましたが、姫はどこまでも強情です。

『いーえ私しは存じませぬ』

そこで 守り神様は 又其女の子を引っさらって消えて仕舞ひ
ました。

さて翌くる日になりました所が、今度は もー大勢の家來ど
もが 承知しません。

『奥様は人殺した、御自分の子を三人までも殺した、どうして
も所刑にせねばならぬ。』

といふのです。三度が三度まで、子供を失くしたのですから、
殿様も 今度はもー辯護の仕様がありません。そこで、愈裁判
が始まりましたがどうしたって、百合姫は口が利けないのです
から、言ひ開きも何も出來るものでない。可愛相に、とーく
火炙りの所刑にせられることになりました。



さて、いよく所刑の日に なりますと、所刑場にはうづ高い
 程一面に薪を積みかさねて 其上には百合姫が檜の木に しつ
 かりと縛りつけられて上せられて居ます。やがて定の時が来ま
 すと、其下から一度に火を附けたもんですから、黒煙は一面に
 空に舞ひ上って お日さままでが 眞黒く見える様になりました
 た。所が今焼き殺されよーとしました其瞬間になりますと、さ
 しも今の今まで鐵の様に強情だった姫の心も忽ち解け初めて、
 嗚呼悪い事はせぬものだ と氣が付いては、今迄偽をついて居た
 事が 無性に恐くなって 『せめて死ぬ前に 門を明けた事を白
 状したいものだ』と心の中で思ひました。すると不思議にも、
 姫の舌が動いて來た。夫で思はず

「オー 我が守り神様よ、今こそ白状します」

と叫び出しました。そーしますと、今迄晴れ渡って居た空が急に曇って来たと思ふと俄に大風がピューッと吹いて来て、大粒の雨がザー／＼と降り出して今に燃え上らうとして居た火をすっかり消してしまひました。

夫から又元の様に空が晴れ渡ったと思ふと、今度は眩ゆい程の御光が空一面に光り輝いて、其中からあの柔しいく守り神様が、降りて来ました。其側には、百合姫の二人の子供が音なしに立って居て、一人は神様の懷に抱かれて居ます。そこで神様は、此三人の子供を百合姫に渡して夫から姫の舌もゆるめて下すって次の様に仰いました。

『悪い事をして
も、後悔して其罪を白状さへすれば
叱度許さ
れるのだよ』

後悔して其罪を白状さへすれば

十二

叱度許さ

（おしまし）

ねづみとるくふー

ねづみの、はいれるくらいな、あなの、あいた、
かねの、これを、こしらへて、そのなかにごちそー
を、たくさん入れておくと、よる、ねづみが、そ
のあなから、はいて、よくばってあるだけのごちそ
ーを、みんなたべるから、とーくおなががふく
れて、もとのあなからでられなくなって、つかまり
やすとた。